

河口堰ゲート閉鎖25年・生物多様性 COP10 から10年！ 開門調査の実現を！  
シンポジウム

# よみがえれ長良川2020

変わりゆく長良川の魚と生物多様性

講師 向井 貴彦 (岐阜大学准教授)

パネラー

大橋 修 (サツキマス漁師)

堀 敏弘 (釣り人)

コーディネーター

粕谷 志郎 (長良川市民学習会代表)

2/29 (土) PM1:30~4:30 (開場1:15)

岐阜大学サテライトキャンパス大講義室 JR岐阜駅北  
岐阜スカイウイング 37東棟 4階

参加費 500 円 (予約不要)

主催 よみがえれ長良川実行委員会

(連絡先 武藤 090-1284-1298)



## 河口堰ゲート閉鎖 25 年 開門調査の実現を！

「宝の川やった長良川は、河口堰ができて流れが止まり、川底には砂とゴミがたまり、魚の棲まのおぜん川になってしまった。どうか、堰を開けて長良川を助けたってくだせえ」親子三代にわたり長良川下流でサツキマス漁を営んでこられた大橋亮一さんが、昨年亡くなるまで訴え続けられた言葉です。

長良川の河口をふさぐ河口堰のゲートが閉鎖されて 25 年。海とのつながりを断たれ、長良川は大きく変わってしまいました。ヤマトシジミの姿は消え、日本有数の漁場は失われました。堰上流側は水位を上げたままの人工湖となり、様々な生きものが棲む豊かなヨシ原は 90% 消滅し、伊勢湾の環境にも大きな影響を与えています。

河口堰はアユ、サツキマス、ウナギ、モクズガニ・・・など海と川を行き来する多くの生きものの障害となっています。長良川の特徴でもあるアユの仔魚は海に下れず、漁協が中流の岐阜市で捕えた落ちアユの卵に人工授精し、1 億を超える受精卵を河口へ運搬、人工水路で孵化放流を行っています。人の手を借りてしか生息できない状況のもと、岐阜市は長良川の天然遡上アユをレッドリストで準絶滅危惧種に選定しました。

アユの漁獲量が河口堰建設以降激減する一方で 2015 年、「清流長良川の鮎」が国連食糧農業機関により世界農業遺産に認定されました。岐阜県は、これを契機にアユのブランド化、漁獲量日本一をめざし大量放流に拍車をかけています。アユだけでなく魚類全体の生態系の攪乱に危惧の声が広がっています。

長良川は環境・生態系の回復のために今一番必要なことは、汽水域を復活し流れを取り戻すことです。2010 年名古屋市で開催された生物多様性条約締約国会議 COP10 では、「自然と共生する世界」の実現をめざす愛知目標が採択されました。節水意識の普及により水需要は減少しており、今後の人口減少でさらにこの傾向は明らかになります。2011 年、最大の利水者である愛知県は、長良川河口堰を検証する委員会を設置し、河口堰の開門調査を提案しました。この提案は開門による「塩害の危惧」にも十分配慮したもので、国・事業者・関係自治体の協議が求められています。

愛知目標 10 年の節目となる今年こそ、河口堰開門に向けた確実な第一歩の年としましょう。

一昨年、熊本県球磨川の荒瀬ダムで、日本初の大規模ダム撤去が地元住民と時間をかけ協議をしながら完了しました。その結果、川は流れを取り戻し、河口部の川も海も目に見えて環境回復しました。

昨年、韓国釜山市のナクトンガン（洛東江）河口堰の試験開門が始まりました。1987 年運用開始以来、堰の開放をめざす市民は釜山市を後押しし新政権とも連携し、2025 年の河口堰全面開放めざして前進しています。また「4 大河川事業」で建設されたダムのゲート開放や撤去も市民参加で進んでいます。

デルタの国オランダでも、河口堰を開放して汽水域を回復するたくさんの実績を積み重ねています。ヨーロッパではすでに 4 千のダムが撤去され、川の流れを取り戻す取り組みが進んでいると言われています。

河口堰開門は、世界の流れです。

## シンポジウム登壇者のプロフィール

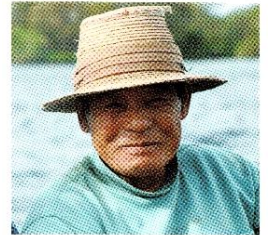
### 向井 貴彦（岐阜大学准教授）



1971 年生まれ。滋賀県出身。専門は魚類学・保全生態学。野外調査、DNA 解析、博物館標本の活用など、さまざまな技術を駆使して汽水魚や淡水魚などの生態や進化を研究するとともに、絶滅危惧種の保全や外来種問題についての研究を行っている。日本魚類学会自然保護委員会委員。愛知県長良川河口堰最適運用検討委員としても活躍している。

### 大橋 修（サツキマス漁師）

1937 年生まれ。羽島市小熊町出身。祖父から三代の川漁師。父・定夫さんは、漁協役員として河口堰建設反対運動の先頭に立った。兄の亮一とは、一心同体でサツキマス漁に励んだが、昨年、亮一さんが逝去。現在、ご家族の協力を受けて、長良川の漁を守り続ける。「漁では兄貴に負けんぞ！」と決意は固い。



### 堀 敏弘（釣り人）



1952 年生れ。岐阜市出身。子どもの頃から釣りに親しむ。「長良川河口堰建設に反対する会・岐阜」で建設反対運動に取り組む。名古屋市立保育園の男性保育士の草分けを担う経歴をもち、長良川と釣りが好きすぎて、23 年前に郡上市・吉田川のほとりの古家を手に入れ、毎週岐阜と郡上を往復している。現在、大好きな釣りを続けながら川を守る運動に参加している。

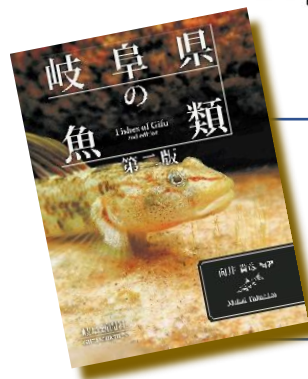
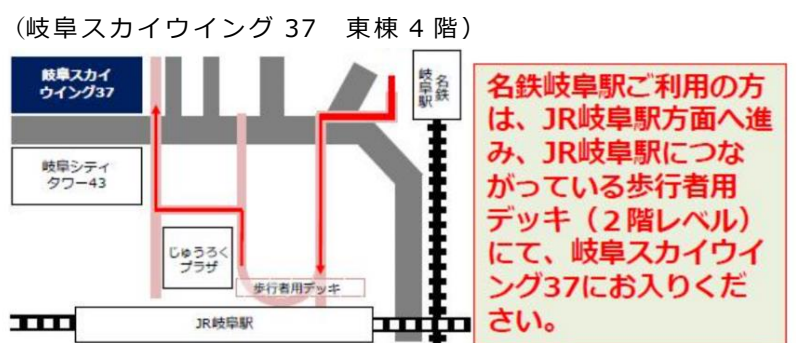
### 粕谷 志郎（長良川市民学習会代表）

1949 年生れ。岐阜県不破郡垂井町出身。岐阜大学名誉教授・医師。研究者として長良川下流域生物相調査団に参加し河口堰が長良川に及ぼした環境悪化の実態を明らかにした。河口堰建設に反対するとともに、現在、河口堰の開門をもとめる 29 団体からなる「よみがえれ長良川実行委員会」の共同代表として市民運動を牽引している。



### 岐阜大学 サテライトキャンパス

#### 案内図



### 「岐阜県の魚類」大好評 第二版発行！（著者割価格 3,200 円）

今回のシンポジウム講師の向井准教授が 2017 年に出版した「岐阜県の魚類」の第二版が完成しました。初版以後に記録された魚種を追加し、各魚種の解説もアップデートするとともに、多くの写真を追加することで、魅力的な岐阜県の全魚種を紹介し、現在の岐阜の自然の姿を伝えています。